

鬼才・石井岳龍(aka聡互)は健在なり—。

久々の石井監督の新作。
監督の映画制作の原点に帰ったような
意欲溢れるこの作品に、僕は気持ち良く打ちのめされた。
まるで福島原発事故を予測してたような
事件性と人間存在。僕らは冷酷に、いや冷静に処分される。

—— 遠藤ミチロウ (ミュージシャン)

新しい名前と、新しいアートフォーム。
『エンジェル・ダスト』を観た時も思いましたが、
石井岳龍監督は変化と更新を恐れない作家。
だから好きなんです。

—— 森直人 (映画評論家)

素晴らしい！石井監督が敬愛するブニュエルの領域に
入りつつあるのが個人的に何よりも嬉しい。
撮影は3.11以前ながら3.11後の現在の状況を
予言的に取り込んでいるのに驚かされる。
絶妙な編集と多くの若手キャストの
アンサンブルを見事にまとめあげた。

—— わたなべりんたろう (映画ライター・監督)

石井岳龍監督作品

生きてる ものは いないのか

ここまでやりますか？
石井監督、龍になったからといって、
ここまでやりますか！？

—— しりあがり寿 (漫画家)

???からの!!!!!!
スゲえモノを観た!!!!
爆音で感じたい爆・映画!
こういう映画を
観る為にも、
死にたくない。

—— 伊賀大介 (スタイリスト)

殺虫剤を撒かれてからだをのたうち回らせ息絶えていく虫。
この映画の中で死んでいく人間がそんな虫に見えた。
精神の傷みも肉体の傷みも理解できないし、してはいけない。
死がただの行為としてあり残るのは死体のみ。

生きることも死ぬことも、それ自体に意味はない。
だからこそ楽しいのであり素晴らしいのであり、
意味を求めてあがく人間が滑稽で愛おしいのであり、
そんな人間たちの無意味な生死の熱量が
せめて地球の営みのどこかに
役立っていたらいいなあなんてことを思った。

—— 横浜聡子 (映画監督)

おそらくこの映画化作品は
2012年を代表する日本映画になるだろう。
個人的には、間違いなく
「ぶっぎり」のベストワン!であると確信している。

—— 相田冬二 (ノベライザー)

まさに現代の映画
多少の前後はあれ人はみんな死ぬのだという事実を、
短時間に集中するとこうなると思わせて、
そんな陳腐な宿命のメタファーではないのだと
観客に別の次元をつきつけるラストが圧倒的だ。

—— 山田太一 (脚本家/小説家)

ポックリいく世界の終わりが、なんだか魅力的!
生きてるものが平等に滅ぶ光景をはじめで見ました。

—— 花くまゆうさく (漫画家&イラストレーター)

「人は、いつ死ぬのか分からない」それは生まれた瞬間から、
常に隣り合わせの紛れもない事実だ。
この作品からは「人の生き死にの縮図」を垣間見る事ができる。
誰もカッコ良くなんで死ねないんだぜ。

—— 増子直純 (怒髪天)

『見たことのない面白さだ!!』と衝撃を受けたが同時に
『これこそ映画だ!!』と私の脳は未視感と
既視感の間で幸福に混乱した。これぞ岳龍マジック!

—— 緒方明 (映画監督)

傑作すぎる。見事に構成された会話劇から一転する
無言のラストシーンの衝撃が目に焼き付いてしまった。
漫画家は間違いなくこの映画を好きはず。絶対に観た方がいい。

—— よしもとよしとも (漫画家)

騒々しい日々、日頃の人間関係という喧噪から
無声映画化してゆく未来の大地。
おれは47才なんだけど、その昔の新しい時代も通り過ぎて
現代の映画を見た気がします。
途中に入ってくる音がなんぼかおもしろかったです!!!

—— 中村達也 (DRUMMER)

「生きてるものはいないのか」は、不条理劇などと呼ばれてますが、
人が生きて死ぬのになんの不条理もありません。
不条理に思えるのは我々がいつか必ず死ぬってことを
ちょっと忘れて生きてるからでしょう。
そんなことを考えながら書きました。
石井監督の死と僕の死は方法は違えど、
二人ともそのうち死んじゃうのは一緒だなあとします。

—— 前田司郎 (五反田団主催)

監督:石井岳龍/原作・脚本:前田司郎/Main Theme Guitar Played:田淵ひさ子
染谷将太 高梨臨 白石甘日 飯田あさと 高橋真唯 田島ゆみか 池永亜美 札内幸太 長谷部恵介
師岡広明 羽染達也 青木英李 田中こなつ 渡川清彦 津田翔志朗 芹澤興人 杉浦千鶴子 村上淳
協力:神戸芸術工科大学/製作:ドラゴンマウンテン/配給:ファントム・フィルム/©DRAGON MOUNTAIN LLC.

ikiteru.jp

敬称略